

[成果情報名] ヒリュウ台「青島温州」の初着果年の着果法

[要約] ヒリュウ台「青島温州」の初着果年は、主枝上部 4 割程度を無着果にすることで翌年以降の着果が安定する。

[キーワード] ヒリュウ台、青島温州、樹上部摘果、安定着果

[担当] 長崎果樹試・常緑果樹科

[連絡先] 電話 0957-55-8740、電子メール t.furukawa@pref.nagasaki.lg.jp

[区分] 果樹

[分類] 普及

[背景・ねらい]

摘果、収穫労力の軽減や高糖度ミカンの生産安定にののために、わい性台木であるヒリュウ台木が利用が有効であると考えられる。しかし、ヒリュウ台「青島温州」に適する着果初年目の適正な着果方法は明らかにされていない。そこで、ヒリュウ台「青島温州」において、初着果年における着果方法を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 着果初年目に樹上部摘果すると全面着果するより翌年の収量が多い(図1)。
2. 樹上部を無着果にすることで、葉果比の年次変動が小さくなる(表1)。
3. 翌年の着花量(達観)は、樹上部無着果が全面着果区より多く、新しょう量は少ない(表2)。
4. 初着果年に樹上部を無着果とすると、全面着果した場合より樹幅の拡大が抑制されることで樹容積が小さくなる傾向がみられる。(表3)。
5. 樹上部無着果は、一果平均重および一立方メートル当たり着果数は全面着果と比較して有意な差はみられないものの、年次間の変動は小さくなる(表4)。

[成果の活用面・留意点]

1. 樹上部無着果区の摘らい、摘果位置は、主枝先端から主枝長の約四割程度とした。

[具体的データ]

表1 ヒリュウ台「青島温州」の初着果法の違いと葉果比

処 理	葉 果 比			
	1999 4年目	2000 5年目	2001 6年目	2002 7年目
全面着果	31.4	98.4	17.9	46.0
樹上部無着果	31.5	60.7	23.1	43.2
有意性	NS	NS	**	NS

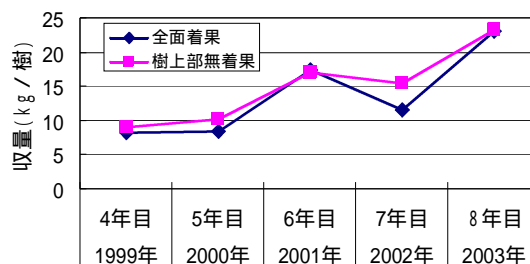


図1 ヒリュウ台「青島温州」の初着果

注) 葉果比：1 樹当たり全着果数に対する葉数の比 方法の違いと収量

表2 ヒリュウ台「青島温州」の初着果法の違いと着花量、新しょう量

処 理	着花量				新しょう量			
	2000 5年 (1~5達観)	2001 6年	2002 7年	2003 8年	2000 5年 (1~3達観)	2001 6年	2002 7年	2003 8年
全面着果	1.2	5.0	1.1	4.0	2.7	1.0	2.9	1.6
樹上部無着果	2.0	4.8	1.3	3.4	2.2	1.0	2.7	1.9
有意性	**	NS	NS	**	*	NS	NS	NS

表3 ヒリュウ台「青島温州」の初着果法の違いと樹容積

処 理	樹容積 (□)					樹高 (m)				
	1999 4年	2000 5年	2001 6年	2002 7年	2003 8年	1999 4年	2000 5年	2001 6年	2002 7年	2003 8年
全面着果	5.3	5.7	4.5	5.2	5.3	2.1	2.1	1.9	2.0	2.1
樹上部無着果	4.7	5.5	4.6	5.2	5.3	2.2	2.1	2.0	2.0	2.2
有意性	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS

表4 ヒリュウ台「青島温州」の初着果法の違いと果実重、着果数

処 理	1 果平均重 (g)					着果数 (個 / □)				
	1999 4年	2000 5年	2001 6年	2002 7年	2003 8年	1999 4年	2000 5年	2001 6年	2002 7年	2003 8年
全面着果	122	183	109	146	107	13.9	8.3	36	16.1	42.6
樹上部無着果	130	177	115	134	118	15.7	11.0	32	23.6	38.1
有意性	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS

[その他]

研究課題名 : 温州ミカンの品質保証果実の少資材・低コスト生産体系の確立
 予算区分 : 国庫 (地域基幹)
 研究期間 : 平成 11 ~ 15 年度
 研究担当者 : 古川 忠、山下義昭